

行き場のない人たちに 安息できる「終の住み家」を

山谷・すみだリバーサイド支援機構代表理事・施設長 **山本雅基さん**



労働者の街に誕生した 在宅型ホスピスケア施設

東京・山谷地区(台東区)には簡易宿泊施設が多く建ち並んでいます。この通称ドヤ街とも呼ばれる一画に、ホスピスケア施設「きぼうのいえ」があります。「ホームレスや身寄りのない、病の重い人たちに終の住み家を」と、代表理事を務める山本雅基さんが、看護師でもある妻の美恵さんと二人で、平成十四年十月に開設した在宅型のホスピスです。

山谷は、戦後すぐから単身の日雇い労働者が集まる街として知られ、高度成長時代やバブル時代の建設ラッシュを支える貴重な労働力を提供し続けました。しかし、バブル崩壊後の現在では、高齢化した労働者たちの中には、仕事も住む家もないまま、孤独にひっそりと死を迎える人が増えていきます。「そうした行き場のない人たちに手を差し延べたい」と、一念発起したのが、山本さん夫妻だったのです。

四階建ての施設には、五畳弱の広さの個室が二十一室あります。各部屋には、エアコン、ベッド、洗面台、冷蔵庫、ビデオデッキ付きテレビなどが備えられ、ナースコールも完備されてい

ます。白を基調とした部屋は清潔に保たれ、大きめの窓から外の風景も眺められるなど、住み心地はとても快適そうです。共有スペースには、食堂、談話室、診察室、浴室などがあります。この施設を建てる際、山本さんが何よりもこだわったのは、「個室」という空間を確保することでした。

「厳しい社会生活を経験してこれた入所者の方たちが安心して暮らすことができ、それまでの生活様式を尊重するために、プライバシーの守られる個室でなければなりませんでした。大部屋を設ければ、収容人員を増やし、コストも削減できる、とアドバイスしてくれる人もいましたが、それでは従来の簡易宿泊施設の延長でしかありませんから、この点は譲れませんでした」と、山本さんは言います。

入所者の多くは末期がんやHIV(ヒト免疫不全ウイルス)、脳梗塞などの重症患者で、ホスピスケアが必要とされた人々ですが、ほかにも「重い糖尿病や多臓器不全など、長期療養が必要なのにホスピスでのケアが認められず、孤独な闘病生活をしている人たち」も受け入れているそうです。

現在、入所者のケアは山本さん夫妻を含めて約三十人のスタッフ・ボラン

ティアと、三人の医師とで行っています。現在の稼働率はほぼ百パーセント。福祉事務所や医療機関などからの要請をもとに作成する入所者のウエイティングリストには、今も空室を待つ多くの人が名を連ねているそうです。

自分を必要とする人々が 山谷にはたくさんいる

学生時代に神学を学び、「東京・生と死を考える会」などに参加していた山本さんは、難病の児童と家族のための宿泊施設「ファミリーハウス」創設に携わるなど、在学中からさまざまなボランティア活動を行ってきました。卒業後は同施設の専従事務局長となりましたが、ファミリーハウスの活動が広



昭和38年東京都生まれ。上智大学神学部卒。平成4年から難病の児童と家族を支援するNPO(非営利組織)の宿泊施設「ファミリーハウス」の運営委員、同9年から専従事務局長を務める。退職後、非営利の有限責任中間法人「山谷・すみだリバーサイド支援機構」を設立し、「きぼうのいえ」を開設。

く認知され、運営が軌道に乗ったことを見届けた平成十四年、「模倣ではなく、マザー・テレサの日本版のような活動がしたい」と、退職を決意。「きぼうのいえ」開設の準備を始めました。

山谷を選んだのは、かつてテレビで見た山谷の様子が印象に残っていたことと、施設建設のために最もふさわしい場所がこの地に見つかったことなどの条件が揃っていたからです。

当初は自己資金が三百万円しかないため、既存の集合住宅の何部屋かを借りて運営するつもりで物件探しをしていました。しかし、死を看取することを前提にした活動を受け入れてくれる賃貸物件は見つかりません。行き詰まった山本さんは、一度訪れてあきらめた現在地を再び訪ね、土地の購入を決意したのです。

「そのとき不動産屋さんに、『この山谷には、山本さんが必要としている人がたくさんいる』と言われたことで、決心が固まりました。幸いにも資金を提供してくれるところも現れ、結局、土地購入費と施設の建築費と合わせて一億二千五百万円の借金を抱えてのスタートとなりました。

「特別な気負いは全くありませんでした。子供のころから苦しみ困っている人たちを見捨ててはおけないと思う性格だったので、小さいときにできなかった宿題を、今、解いているようなものです」

看取りの体験を通じ、成長するスタッフたち

「きぼうのいえ」の入所者が、山本さんやスタッフに示す反応はさまざまです。多くの人は「人生のラストフライトを静かに迎えられる」と、感謝しながら穏やかに日々を過ごしています。

しかし、中には「こんなに親切にするのは何か裏があるのではないか」「自分は利用されているのではないか」と疑心暗鬼に駆られる人や、「サバイバルしていないと生きている実感がない」と、自分から退所していく人もいます。



「つまり、それだけつらい人生を歩んできたということなんです。私たちはそこを理解してさしあげないと」と、山本さん。開設以来、これまでに六人の入所者が他界したそうですが、「そうした看取りの体験を通じ、スタッフの側にも、ホスピス・ケアをしていくための成長が常に求められていると感じています。入所者が死を恐れ、大切な残りの時間に虚無感を抱いてしまわないよう、精神的なケアも大切です」

「きぼうのいえ」では入所者に支給される生活保護費や障害者手当の中から、



入所者の個室で妻の美恵さんと

食費や光熱費などを負担してもらっていますが、運営には毎月百万円の赤字が出る状態で、不足分は寄付に頼らざるを得ません。しかし、山本さんはくじけることはありません。

「これから独り暮らしの老人はますます増加しますから、こうした施設はもつと必要になるはずです。この活動が行政にも理解され、同じような施設が全国にたくさん誕生することを願っています」と、力強く話してくれました。